

「家族って何だろう？」と言及する専業主婦である母親との面接過程

大学院研究生 岩 元 正 知

要 約

本研究では、長女の習癖に対する苛立ちの背景に夫からの育児協力を得られず、不満を抱えている専業主婦である中年期女性の事例を取り上げ、夫への感情が同世代の男性セラピストに転移したクライアントとの関わり方を紹介し、介入によって変化をもたらした夫から肯定感を得られたクライアントが、育児や家族を通じて再び個性や生き甲斐を見出すに至った要因について考察することを目的とする。本事例のクライアント理解を通じて、夫から協力を得られない専業主婦が抱える育児ストレスの中に育児の不安だけでなく、家族との生活に生き甲斐や充足感を見出せず、個性の埋没という様子が浮き彫りにされた。クライアントの思い描く食育を通じての健康的な家族像を夫から肯定された時、食育実践者としての生き方に個性が見出された。しかしながら、食育の本質はそれを実践すること以上に、食卓の中にある家族とのコミュニケーションを形成し、子どもの個性や社会性を育むことであり、そこにクライアント自身の生き方を模索するプロセスとなればというセラピストなりの想いがある。

キーワード：家族・専業主婦・転移・食育

I. はじめに

幼稚園主催の心理職による育児相談に来談するクライアントは、プライマリーケアテイカーとなる母親が主であり、問題となる子どものことや育児不安（ストレス）など、育児相談という名目を意識した悩みを当初の主訴として掲げていることが多々見られる。しかし、面接過程において、例えばクライアント本人の子どもに対するしつけの問題が、実際にはクライアントと夫との関係性と密接に影響を受けている場合、クライアントが抱えている子どもの育児相談という枠組みをセラピストが柔軟に対応することによって、クライアントは当初の主訴となる子どもの問題からもう一つの主訴となる夫の問題へと焦点を移行していく。セラピストがクライアントとの面接過程の中で、その主訴となるクライアントが抱えている問題像に注目することは、クライアントの心の中の現実を浮き彫りにすることへとつながる。そして、クライアント個人だけでなく、クライアントを含む家族と密接に関わっていることが明らかにされた時、クライアントは家族を通じて、自身のより良

い生き方を模索するプロセスを行っていく。

II. 事例の概要とその考察

本稿では、幼稚園の主催する心理職による育児相談における親面接において、筆者がセラピスト（以下、Th）として担当した臨床事例の概要とその考察を記述する。本事例は個人面接を治療構造とする中で家族理解を深めながら自己理解を深めるための短期的・統合的なアプローチがとられている。なお、本事例の報告にあたって、本稿ではクライアント（以下、Cl）のプライバシーに配慮し、ケース理解に差し支えない範囲で、具体的な背景や個別な事象については割愛・修正して報告している。

〔事 例〕：30代の専業主婦である母親A

1. 家族構成

30代の夫婦。幼稚園年長で6歳の長女と年中で4歳の次女、2歳の三女の5人家族。

2. クライエントの個人面接までのいきさつ

年長で6歳の長女による爪かみの習癖を主訴として来談した。長女の担任は、CIの子どもに対する養育態度の厳しさや、本音の分かりにくさなど、自身ではどう対応して良いか分からない状態が続いていることも含めて、Thに対し「いろいろ抱えてらっしゃるかもしれないので、たくさん話を聞いてあげて下さい。」と念を押した。前年度担当の臨床心理士とも面接を行っているが、詳細についての引継ぎはなされていない。現在、長女の爪かみは解決しておらず、今回も担任からの薦めもあり、Thとの個人面接に至ることになった。

3. 面接構造

初回面接は60分で2回目以降は30分。面接場所は園の別館にある面接室で実施した。

4. 面接経過

面接中のCIの発言の直接引用は「 」で、Thの発言は〈 〉で記してある。CIの発言する「先生」とはThを指している。

初回面接 (X年6月)

1) 当初の主訴

CIは目鼻立ちがハッキリととしており、時に眉間に寄せられる表情の陰しさが印象的である。「男性の先生は初めてなので・・・あまりいらっしゃらないので・・・」と男性であるThに対する第一声がなされ、三女も一緒だったこともあり、娘をあやししながら面接が開始された。

長女の爪かみ発生は、3年前の次女の誕生に遡る。それまで長女は第一子として周囲から大切に育てられた。「長女の爪かみの癖は、私が執拗に叱る時、頻繁に見られます。」と語るCIに対し、Thが〈どのような時に執拗に叱るのですか?〉と質問すると、「每晚20～30分、本の読み聞かせをしています。その時、爪噛みをする、読んであげているのにというイライラが生じ、思わず手を掃います。娘は"何で怒ってるの?"という感じで、言えば言うほど爪噛みをするので、時々ハッ

とします。」と胸の内が語られる。次に〈どのような時に爪かみを止めますか?〉と例外の質問をすると、「作業する時(手を使う時)はしません。」と回答がなされる。

Thは〈手を使う時は爪を噛まないんですね!〉と驚嘆の表情で前置きし、ここから長女の爪かみを見てイライラを感じるCIのストレス軽減に焦点を当て、〈娘さんが生活を送る上で、Aさんにとって(爪かみは)何か支障がありますか?〉と質問すると、「別に支障はありません。やっぱりストレス解消なのかな?ちょっと諦めモードです。」とCIは初めて笑みを浮かべ、「昨年も前任の先生にこの件で相談していました。自分としても(娘の)恥ずかしいという芽生えを待ちたいと思っています。」と回答がなされ、ここで当初の主訴に対する一時的な解決がなされる。

2) もう一つの主訴

三女のトイレに付き添い、面接室に戻ってきたCIは、「先生にこんなことを話してもいいのかわからないけれど・・・」と重い口調で言葉を濁したので、Thは〈どんなお話でも構いませんよ。娘さんのことでも、Aさんご本人のことでも、今、Aさんが困ってらっしゃることを教えてください。〉と、それとなくCI本人が抱えている問題像に向けて投げかける。

すると、「本当は・・・、主人の子ども達への関わりの少なさ・・・(子ども達を)みてくれたり、接してくれたりするといいいのですが・・・なんせ家に居りません。平日は子どもたちが就寝した深夜に帰宅して、家族と食事するのは休日のお昼ご飯だけです。それに主人は忙しくない時でも子ども達に10分と関わりません。この弊害がどんな風にでてくるのか心配です。」とCI自身の夫に対する不満が表れてくる。「今朝も長女が着替えなくて、散らしていると、それを見た主人が二言目にはキレていました。長女は、"パパが言うからやる気なくなった"と言っていました。でも長女は主人を好きなんです。頑張ってくれているのは分かるけど・・・そこまで仕事に・・・自分じゃないといけないという責任感が強く・・・妻を家にお

いて、(子ども達を)任せっきりで・・・こんなだから日本は少子化に歯止めがかからない・・・。」と夫の育児不参加に対する不満を表出したことによってClは饒舌になり、いつしかそれがThの個人的なことに向けられるようになる。

「家族って何だろう？こんなじゃ、主人がいない方が楽です。下手に(子ども達に)関わって制圧するより・・・。私としては(家族で)楽しく頑張っていきたい。でも話をする時間すらない。先生は結婚していますか？」とClからのThに関する質問に、〈いいえ・・・〉と言葉少なめに返答する。Thが独身であることを知ったClから「独身の頃と違って、結婚してから自分の個性が埋没して・・・何なんだろう？」と独身の頃の自身と、結婚後の自身との不協和を言及される。

ここでThは、当初の主訴の当事者である長女と、もう一つの主訴の当事者である夫との関係性に注目し、〈お姉ちゃんは何故お父さんを好きなのですか？〉と質問する。Clは「私が仕掛けることがあるんですけど、わざと主人に(もたれかかる様を演じながら)"大好き"ってすると、私と主人の間に長女が割って入ってきて"パパは私と結婚するんだ"と言います。主人は優しいし、楽しいし、子どもが楽しいという接し方が分かっているんです。」と夫の本来持っている優しさと、そのことを長女が知っていることを客観的に語っている。

〈ご主人はAさんに対して、何かリクエストはありますか？〉というThの質問に、「特にありません。主人のいいところは、その辺のことをあまり口に出さないことです。いつかは(私のことを)誉めてくれました。子ども達が好き嫌いなく食べることや、おむつが早く取れたことに対して"成果がでた"と言ってくれました。姪っ子達と比較して早く感じたようです。私は食べることと健康が一番だと考えています。食べること(食育)に命を懸けています。」とClから力説される。

その後も、「朝、主人のお弁当を作って、主人はそれをお昼に食べて以来、帰宅する深夜まで何も食べないんです。他の人は途中で、カップ麺を食べたりしているようですが、それもしないんで

す。こんなことなら、職場の近くにアパートでも借りて、週末だけ帰ってくる方がいいですよ・・・家族って何でしょうね。」とClから夫の食事への取り組みに関する不満が表出される。

その他の情報として、今秋、新しい家屋に転居することが挙げられる。しかしClから、それが楽しみばかりでなく予算オーバーであることや、現在の狭い家屋では掃除がきちんと行き届くが、広い新居で子ども達が片付けない場合、掃除がいき届くのだろうか、など不安な思いが語られる。同時に、「子ども達にも引っ越すという自覚を持って欲しい」とも付け加えられる。

3) Clに対する介入

〈3日に1回ぐらいお姉ちゃん(長女)に関する良い点をご主人に報告してみてください。それは園であったことや、お家であったことなど、何でも構いませんので。人は不思議なもので満腹になると穏やかになりますから、食事が終わった頃、何気なく話してください。それから何かご主人に変化が見られたら、次回、教えていただけないでしょうか？〉と伝える。最後にClから「子どもは嫌になりますよ。先生も将来、結婚して子どもが生まれたら、私の言っていることが分かるかも・・・。今日は取り留めのない話になってすみませんでした。」と話がなされ、面接を終了する。

2回目(X年7月)

4) 夫に対する介入

Clは夫が帰宅し、ちょっとした夫婦間の会話があるときには「今日は(長女の)お友達を連れてきて遊んだよ！」などと長女の報告を意識的に始めるようになった。これまで夫は帰宅後、新聞やテレビに目を向け、「関わってくれるな」といった拒絶したような雰囲気醸し出していた。しかし、Clからなされる子どもの報告は、楽しい話だけでなく失敗談も含めて、笑顔になるような話題であり、次第に夫も興味を示すようになった。このようなClからなされる子どもの報告に夫が耳を傾けるようになったことは、夫婦の喧嘩が由来している。

最近、夏祭りの見物のために、夫妻は土曜日、日曜日を利用して夫の実家に子どもたちを連れて行くことになっていた。ところが当日、夫が夏風邪を患ったことで、子どもたちをうるさく感じ、CIに対し「うるさいから、出て行ってくれないか！」と声を荒げた。その時、CIは夫に対し、「馬鹿なんじゃない」という思いを感じた。結局、CIと子どもたちだけで実家に行くことになった。夫は食欲がないまま月曜日を迎え、出社した。帰宅後、CIが食事を出そうとすると「いらないうたら、いらない！」と切れた口調になり、今朝渡した昼食用の弁当を食べ始めた。夫の行為に対し、CIは「悲しかった・・・」と洩らしながらも、「きつかったんでしょね。体調が・・・」とも答えている。

翌日からCIの無視が始まった。「何か食べる？」という夫とのコミュニケーションツールとしての食に関する言葉がけも「あえて言わなかった」という。それからお互い会話のない状態が三日間続いた。CIは夫の体調を気にしながらも「病気だったけど（夫の態度が）悪かった日」として捉え、「（夫に）謝らせたい気持ち」を感じていた。

三日後、帰宅した夫に母親から「おかえり・・・そうめん食べる？」と話しかけた。ThがCIの行為に対し、「何かきっかけがあったのですか？」と質問すると、「友達に今回の話を聞いてもらい、熱が冷めた」と答えている。CIによれば、夫は「謝らせようと追い込むと駄目なタイプ」であるから、逆にこちらから話しかけることで喧嘩の雪解けになると考え、自ら話しかけることにしたとのこと。CIからのアプローチによって、夫が笑顔を見せたことをきっかけに、子どもの楽しい報告を意識的に始めるようになった。

子どもの報告を始めるようになったある日、夫から「来月には夏休みを取って、みんなで遊園地に行こう！」という提案がなされる。CIは、「夫からこのような提案がなされたのは初めてのことで、一生に一度のことかもしれない」とし、「考えたんたんでしょ」とそのことを前向きに捉えている。それから数週間、「夫の悪い面が目立たなくなった」とCIは感じるようになった。今秋、

転居することから、週末になると夫は家族を家具屋に連れて行き、子どもたちに対し、「どんなベッドが欲しい？」と「子どもの反応」を見ているようで、子どもたちが「嬉しい反応」を示すと、夫もまた「嬉しい」と感じている様子を語るCIであった。

5) 告白

ここでThから〈Aさんは、ご主人の様をどのように感じられましたか？〉という質問がなされると、CIは「夫婦は悲観的に見れば、（一方が）合わせてあげないと上手くいかない。あきらめですかね。」と回答する。そして一時の沈黙の後、「主人にも誰にも話したことがないんですけど・・・私は今の主人と何があっても離婚しない覚悟をしています。」と続け始める。「私は帝王切開で3人とも出産しています。そして子宮破裂を防ぐため（卵管）結紮手術を勧められました。そこで離婚しない覚悟を決め、迷わず手術をしました。だから再婚しても妊娠しないんです。原点に戻れば、子どもが生まれたことは奇跡なんです。他に家族を変えることはできません。」と何があっても離婚しないという強い意志と、「だからこそ家族には、いつもユーモアが必要なんです。」とこれからの家族と共に生きていくという思いが語られる。

CIによれば、結婚後、不妊に悩んでいた時期を過ごし、不妊治療を始めたとのこと。治療による「痛みがキツイ」と回想しながら、当時、読んでいた不妊の本に記してあった1人の子どもが生まれる確率からすれば、自分には今、子どもが3人もいることが「奇跡であり、神様が託してくれた。ありがたいな。」という感謝の気持ちがある。そして自身の不妊の原因を幼少時代からの偏食にあると位置づけ、「もっと食べていれば・・・」という後悔の念があり、であるからこそ子どもたちには「食べる力をつけさせたい」と強く思いを抱くようになった。CIは「子どもを育てるためには、食べること、寝ること、それが一番大変なんです。そのリズムを作るには、努力がいるんです。」と食育に対する強い思いを語っている。

このようなCIであるが、「子どもたちは上手く（完璧には）育たない。でも回り道をしてでも・・・無駄があっても、今日の自分があるから。だから柔軟でありたい。」と話している。そして「これから家を作ることは、楽しみより大変さが大きい。それに主人の転勤をあと数回は覚悟しなければ・・・。主人から私のことを（子供に対し）しっかりやっていると信頼を持ってもらいたい。」と今後の家族を守っていく決意を語り、面接を終了する。

3回目（X年9月）

6）夫の変化

Thは〈前回、夏休みにご家族で遊園地に行くかもしれないことをご主人から提案されたとお話されていましたが、どうなりましたか？〉と質問する。CIはその問いに「遊園地には行きませんでした。その代わり、家族で遊園地の隣にある公園に行きました。」と回答する。遊園地では子どもたちの年齢や身長制限から乗れない乗り物が多く、結局は隣接する公園で遊ぶことが中心となったのであるが、生き生きとして楽しそうな子どもたちを見て、「結果的に良かった」というCIの前向きな思いが語られる。

そして、CIから「最近、主人が変わった」という報告がなされる。夫は最近耳にする職場の複雑な話や、同僚の父親の死など、身近な人たちがその家族の中に大変なことを抱えていると思うようになり、彼らと比較して我が家族が幸せであることを再認識する。さらに、CIから夫が「俺は幸せだと思うと2回も伝えてきた」という話がなされる。これを機に、夫は帰宅時間が以前より早くなり、長女がトイレを渋っていると一緒に連れて行くなど自発的な行動が増え、CIは「大変なことをしてくれる（手伝ってくれる）」と語っている。

最近の夫は連休を取り、起きている間は子どもの世話をしてくれていた。例えば、長女が「出たくない」と言えば、「外にでも出ようよ」と声をかけ、外に連れ出してくれるなど、以前には見られなかった様子がそこにあり、CIは、「いてくれて

助かった。ありがとう。」という思いを感じる機会となった。来月から再来月にかけて新居が完成することもあり、「夫の意識が変わってきたのではないのでしょうか」とCIは感じている。CIとしては大変なローンを抱えることから、家族同士が自覚を持って、つながっていないといけないと改めて家族のあり方を再認識している様子である。

4回目（X年10月）

7）終結

CIから新居に転居した報告がなされる。「引っ越してよかったです。新しい家に引っ越したことで、家族がまとまっています。本当に引っ越してよかったです。」とCIの穏やかな口調から満足感が伝わってくる。

Thが〈（長女の様が）気になりますか？〉と質問すると、CIは「娘はこのままだと赤毛のアンみたいにおしゃべりで空想ばかりしているような感じになるのでは・・・って心配です。でも赤毛のアンみたいに優秀だといいいんですけど・・・」と笑みを浮かべながら回答する。

最後にCIから「この家族で良かった。私はこれからも家族の信頼をなくさないように生きてゆきたい。将来、娘に嫌われる関係になるかもしれないけれど、娘が何か相談するときには私に伝えて欲しい。」という長女への思いが語られる。これに対し、ThはこれまでのCIの娘たちに対する食育や、家族を守ってきた懸命さを称え、ねぎらい、面接を終了する。

〔考 察〕

1. 当初の主訴である長女の爪かみについて

3歳以降の指しゃぶりの背景には、親の愛情不足や養育上の問題、不安を紛らわす回避行為、退行現象などが考えられ、また、爪かみは自虐的・自傷行為的な意味があり、不安や緊張場面、恐怖やストレスを感じたときに発生しやすい。爪かみを習癖とする子どもの親は、一般的に子どもが反抗できないほど過干渉であったり、過保護であったりする。子どもの習癖に対し、親が一方的に「やめなさい」と注意することは、子ども自身が

自らの行為に罪悪感を抱き、自尊心が低くなる可能性が考えられ、むしろその背景にある寂しさや孤立感、依存欲求、自虐欲求などを理解してあげることが大切である（星野，2006）。

本事例では、CIとの面接過程から長女の爪かみに対し、①母親に叱られるような不安な場面と②読み聞かせなど心地よい場面における無意識下になされ、③手に集中している時、すなわち意識下における例外が存在することが示唆されている。すなわち、爪かみの開始時期が次女の誕生に起因していることから、これまで独占してきた両親からの愛情に偏りを感じ、生じた長女の心のトラブルを解消するためのストレス発散に始まり、①現在では不安な場面以外に、②心地よい場面でも見られ、それをある主の避難場所と例えるならば、強制的な改善を試みてしまえば爪かみは解消されるかもしれないが、避難場所を失うことによって新たな心因性の問題が生じうると考えられるため、③本人が意識下にある場面、例えば他者から見られる自身の様に対し、心地悪さを感じられるような発達段階まで、見守ってあげることが、例外のように効果を現す可能性があるだろうと考えられる。

2. CIのThに対する転移感情

初回面接において「男性の先生は初めてなので・・・あまりいらっしゃらないので・・・」と言及しているCIは、男性である筆者に対し、違和感を抱いているようであるが、実際には、事前に園から相談者に対し男性心理職が担当者である旨、説明がなされ、それを理解した上で面接を希望されている。育児相談におけるカウンセラー＝女性という枠組みにおいて、筆者の経験上、単独での面接対象者は100%女性であり、女性Thと女性CIという組み合わせが一般的ではないであろうか。私事であるが、実際に本事例の育児相談を主催している園長は、筆者の所属する女子大学大学院に心理職を依頼し、筆者が担当者として事前連絡をさせて頂いた際に、「先生は男性ですか・・・てっきり女性が担当されると思っていたので・・・お母様がどのように思われるか・・・」と返答している。

CIのような子育て中心の専業主婦が面接対象者の大半を占めている幼稚園主催の育児相談の場合、同世代の有職者女性と比較して夫以外の異性との接触が極めて少ないと考えることが一般的であろう。また日常的に接触している園での関わりの中でも、年配の男性である園長を除いて、多くの職員が女性であること、子どもの親も母親が大半を占めることなど、自身を理解してくれる環境において、夫以外は同性とのコミュニケーションがなされていると考えられる。面接室というある種、密室の治療構造となる空間の中で、夫と同世代の男性Thと密接に関わるような場面は、極めて稀なことかも知れず、前任の女性Thとの面接とは異なった感覚を抱いたのではないだろうか。

三女のトイレで面接室を退出するというタイムアウト的な手続きの後、「本当は・・・」と切り出してから夫に対する不満を表出している場面のCIは饒舌で、且つ攻撃的であり、夫と同性・同世代のThに対し、ある種の怒りや憎しみなどの陰性感情が転移していると考えられる。「家族って何だろう？」と問答しながらの「先生は結婚していますか？」というThに対する個人的な質問もまた広義な意味の転移として捉えるならば、Thが独身であることを知った直後に発せられた「独身の頃と違って、結婚してから自分の個性が埋没して・・・」というCIの「今・ここで」の語りから「現在」そして「過去」の状況を解釈することができる。

現在のCIは専業主婦であり、妻と三姉妹の子育てという役割を担いながらも、生活の大部分が母親の役割で占められている。そこでは次第に、子育てを夫から認められることが少なくなっており、例えば家族の健康のために食育に力を注いでいるにもかかわらず、それが家庭を守る者の当然の役割として捉えられている。有職者である主婦と違い、労働の報酬として給与のような対価を得られない専業主婦であるCIにとって食育を実践することが、有職者や他の専業主婦との差別化や、妻や母親以外の役割となり、そこに個性を見出そうと努めているのではないだろうか？しかしながら現在のCIは、家族の健康のために、そして自

身のために、食育実践者としての役割を家族に注ぎ込んでいるのにもかかわらず、個性が埋没していると感じ、「家族って何だろう？」と捉えるようになっていく。

現在子育てをしている母親は70年代の効率的で合理性を重視した教育ママに育てられてきた世代であり、子どもが生まれるまでには24時間を全て自分のために使ってきた世代と位置づけ、自分一人の時間がないことに対する抵抗感や「一人への時間」への思いが切実である（大日向，2007）。

過去すなわち独身時代のCIもまた、現在とは少なからず対極に位置し、「一人の時間」を持ち、個人として社会との接点を見出し、自分らしさ＝個性を育みながら、理想的な将来像を描いていたとするならば、「子どもは嫌になりますよ。先生も将来、結婚して子どもが生まれたら、私の言っていることが分かるかも・・・」と"今・ここで"のThへの転移、すなわち独身時代の夫の像に対する将来の警鐘を鳴らしているのではないだろうか？

一方、2回目の面接では「主人にも誰にも話したことがない」と前置きしながら、Thに対し自身の（卵管）結紮手術の結果、二度と妊娠しない身体であることを打ち明けており、これを筆者は陽性感情の転移として捉えている。育児に専念しながらも個性が埋没したと捉えていたCIであるが、"今・ここで"のThとの関わりの中にラポールを形成し、そこに社会との接触を見出し、話をする、或いは話を聴いてもらうということによって癒され、これまで自分一人で抱えてきた決意を語らせ、子どもが誕生したこと＝奇跡として感謝しているからこそ健康への思いが強く、"現在"の新たな個性となりうる食育実践者としての役割を主張できたのであろう。であるとするならば、現在の食育実践者であるCIに対し、"現在"の夫から肯定されるという対価の提供が、この家族集団における問題解決の可能性として考えられる。

3. CIから夫に対する介入

CIから提供された夫の像、長女と父親の関係

性や、食に対するポジティブな思いなど、これまでに上手くいっているいくつかのトピックをリソースとして活用し、焦点を当てることによって、CIに対し介入を図っている。それは「私が仕掛けることがあるんですけど」というユニークな一面を持ち、「家族にはユーモアが必要」と言及したCIに対し、センスの良さを期待してのものである。ここでは、家族の歪みを是正するための変化をもたらす、結果としてCIの問題が解決できることをねらいとしている。

Thからの介入課題の提示に対し、CIはプラスアルファのエッセンスを加え、夫へそれを遂行している。夫婦喧嘩をきっかけに、CIは3日間の無視という非言語のコミュニケーションを図りながら、パラドックス的な笑顔になるような子どもの報告という介入をなし、夫に変化をもたらした。夫は次第に子どもに興味を持ち始めるようになり、休暇を取って家族旅行を実施した。また、「主人から私のことを（子供に対し）しっかりやっているという信頼を持ってもらいたい。」と願っていたCIに対し、夫は「俺は幸せだと思う」と感謝の意を唱えた。介入によってなされた夫の変化は、当初、「家族って何なんだろう？」という家族をまとめることのできない自身の苛立ちや、夫の育児不参加に対する不信感など、ネガティブに抱いていたCIの認識を、「（夫が）いてくれて助かった。ありがとう。」とポジティブ感情へと変化させ、家族間に良循環となる相互作用をもたらした。結果としてCIは、家族を通じて自身のより良い生き方や、長女の習癖を本人の気づきがあるまで見守っていけるようなゆとりを抱き、「この家族で良かった」という思いがなされたのではないだろうか。

4. 今後のCIに対する思い

専業主婦にとって、育児不安の本質は、育児や子どもそのものへの不安や悩みではなく、子育て（だけ）している自分や、自分の将来についての不安や焦りである。彼女らは、育児を大事と思えばこそ、子育てを機に例えば職を辞しているにも拘らず、子どもとの生活や育児に生き甲斐や充足

感を見出せないでおり、その葛藤する心理が育児不安の内実である（柏木，2006）。

これまでCIは自身の偏食体験から、家族の健康のために食育を実践することで、そこには自分がこれだけ頑張っているのだから、子どもにも理想的に育って欲しい、夫からも認められたいという完璧な母親像を求めているのかもしれない。食育を実践することで、子ども達を好き嫌いなく成長させることに成功しているが、長女の爪かみという例外的な問題が生じ、いくら注意しても改善されないその様に苛立ちを感じるようになったのだろう。一人娘の頃は全ての愛情を注がれていた長女であるが、次女の誕生により望むと望まざると姉という役割を担うようになり、愛情に偏りやストレスを感じ始め、その訴えを爪かみというサインとして表現している。しかしCIは長女の立場に立って、その行為を心のトラブルから生じるサインとして捉えることよりも、食育によって健康を求める母親の立場から習癖を止めさせたいという思いを募らせている。筆者は長女の爪かみという問題以上に、それをサインとして捉えることなく、苛立ちを感じさせていたCIの様に焦点を当て、訴えの主要人物となる夫に対し、CIを通じて間接的介入を図った。介入を通じて変化した夫からの育児協力やねざらいがCIの求めていた家族像にとって追い風となり、CI自身、食育実践者という役割に改めて個性や生き甲斐を見出し、結果として長女の成長を見守っていく姿勢が見受

けられるようになっている。

但し、長女の爪かみという当初の主訴については、改善されたわけではなく、それはCIの思い描いている健康像ではないのかもしれない。しかしながら、CIが夫に対して抱いていた感情のように、長女もまたかつての自分一人だけに愛情を注いでくれた母親像を求めているとするならば、時にCIが長女と二人だけの時間や空間の中で、長女の自己肯定感を育めるようなコミュニケーションを図ることによって、心のトラブル解消の大きな要素となりうるのではないだろうか。

今回、この家族にとって再出発となる一つの儀式＝新居への転居と捉えるならば、家族は新チームとして船出し始めたばかりである。CIには食育を実践する母親像という個性の尊重だけでなく、食育を通じて、食卓の中に家族とのコミュニケーションを形成し、子どもたちの個性や社会性を育みながら、家族集団の中での自身のより良い生き方を模索するプロセスになればと想いを馳せる次第である。

〔文 献〕

- 秋山泰子（2003）：ジェンダーセンシティブセラピー—中年期女性のカウンセリング— カウンセリング研究, 36, 23-31.
大日向雅美（2007）：自信を持ってないでいる「貴女」へ 母の友2007年2月号 福音館書店 pp26-37.
柏木恵子（編）（2006）：家族心理学への招待—今、日本の家族は？家族の未来は— ミネルヴァ書房 pp111-117.
星野仁彦（2006）：気づいて！こどもの心のSOS—こどもの心の病全書— VOICE pp273-275.

An interview process with a stay-at-home mother who questions, "What is a family?"

Abstract

In this research, it introduces the case with the middle-aged period woman who is a stay-at-home mother who cannot receive the child care cooperation of the husband, and is holding dissatisfaction in the background of irritation to eldest daughter's habit. It aims to consider the factor that comes to find individuality and alive the effect again through the child care and the family in the client that can receive the affirmative feeling from the husband changed by how for relations and intervention with the client that feelings to the husband metastasize to this generation's man therapist.

Key Words : family, a stay-at-home mother, metastasis, educating children to have a healthy diet